

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第128号 会 報 1990年5月10日

目 次

	頁		頁
I 第87回総会ならびに講演会	1	V 次期・次々・次々々期学会講演会開催地	4
II 会長挨拶	1	VI 田中館賞推薦について	4
III 田中館賞審査報告	2	VII JGG編集委員長報告	5
IV 運営委員報告		VIII 寄稿「半世紀前の遺産(その2)」	5
*庶務	3	IX 平成元年度決算・平成2年予算書	6
*JGG報告	3	X 研究助成金案内	7
*WPGM準備進行状況	3	XI 名簿作成について	8
*新入会員	4		

I 第87回総会ならびに講演会

第87回総会と講演会が4月6日～8日、東京工業大学のお世話で同キャンパス内において、第一回地球惑星科学関連学会の合同大会として開催された。7日の当学会総会は、田中会員の開会宣言、丸橋議長選出、河野大会会長挨拶に始まり、まず湯元会員への田中館賞が行武会長より授与され、引き続き審査報告がなされた(本会報III参照)。その後、下記次第に従い、会長挨拶(本会報II参照)、運営委員会諸報告に入り、庶務(本会報IV参照)、WPGM(本会報IV参照)JGGに関する報告(本会報IV参照)等がなされた後、編集委員会より学会誌の出版状況及び財政の窮状が報告された(本会報IV参照)。続いて総会成立を確認後議事に入り、平成元年度決算、平成2年度予算案が原案通り可決された(本会報IX参照)。また懇案のJGG財政についての状況説明と打開策について討論が行われた。次期、次々期、次々々期学会開催について、各々、確認、経過報告、提案が行われ了承された。謝辞の後はほぼ定刻に合同大懇親会に合流した。

*第87回総会式次第

- (1) 開会の辞 (田中会員)
- (2) 総会議長指名 (議長:丸橋運営委員)
- (3) 大会委員長挨拶 (河野大会会長)
- (4) 田中館賞授与 (行武会長)
- (5) 会長挨拶 (行武会長)
- (6) 運営委員会報告
 - *庶務報告 (浜野運営委員)

- *会計報告 (佐藤運営委員)
- *JGG報告 (福西運営委員)
- *WPGM (Western Pacific

Geophysics Meeting) (本蔵運営委員)

- (7) 編集委員会報告 (小口編集委員長)

(8) 議事

- *平成元年度決算・平成2年度予算案審議
- *JGG出版財政
- *次期・次々期・次々々期(来年秋)開催地

(9) その他

- (10) 謝辞 (大家評議員)
- (11) 閉会の辞

II 会長挨拶

この春の学会は例年とは非常に様子の違ったものになりました。地震学会、日本測地学会、日本火山学会、日本地球化学会の「地球惑星科学関連学会」で合同の講演会を開くことができたことです。これは地球科学および惑星科学の分野の学会にとってまさに画期的なできごとであります。これまでそれぞれの学会がべつべつのやり方で行ってきた講演会をひとつに統合して開催しようというのですから、組織委員会のご苦勞は格別のものがあったと思います。会場の準備、大会の運営についても、たんに会場数が増えたという以上に、大変な神経を使われたことと思います。組織委員会の方々および河野大会委員長はじめ東京工業大学

の皆様にお礼を申し上げます。

今回は合同のシンポジウムや共通セッションあるいは特別講演など、いろいろ新しい試みがなされました。いずれも大変成功したように私には思われます。合同で講演会を開いてよかったという声をいくつも聞きました。プログラムには魅力的な講演が目白押しでした。残念ながらそのすべての話を聞くことは本来できない相談で、ほんの一部を聞いたに過ぎませんが、私もプログラムと首っぴきで会場を駆け巡りました。どこも大きな教室が満員で大勢の人が立って講演を聞いているという盛況でした。しかも質疑討論が割当時間いっぱいをつかって非常に活発に行われていました。講演者の方も例年と聴衆が違うので思わず講演に力がいったということも聞きました。

ふだんあまりお会いしない人に会えたのも有意義なことでした。海外からこの大会を機会に一時帰国された方も幾人もあったようです。通訳してもらって熱心に講演に耳を傾けている外国人もおられました。この大会は人を引き付ける力があつたようです。

このような会は今回限りにするべきではないと考えます。なにしろ初めてのことで、大変うまくいった面があれば、不満の残ったことも多いと思います。合同して開くことのプラスマイナスを正當に評価するには、すくなくとも3回くらい続けて開催してみる必要があるのではないのでしょうか。そこで地震学会会長と連名で、この大会に参加した学会に次のような提案をしました。

(1)今年をも含めて3か年間引き続いて合同のを講演会を開催する。現在本年春の合同大会のための連絡会が、関連学会の間で作られているが、この連絡会を合同大会のあと常設の委員会として残し、合同大会の企画運営にあたる。さらに委員会は3か年を経過した時点で、合同の講演会をその後も継続して開催するかどうか、議論して結論を出す。

(2)(1)で設置した委員会では、今後の学会連合問題をも討議し、組織化をさらに進めるかどうか、もし進めるとしたらどのような形態がよいか、などについて検討する。

さらに今回参加されなかった日本気象学会、日本海洋学会、陸水関連学会にはこの提案を送ると同時に、来年以降ぜひ参加されるよう案内を出しました。

本学会では、他の学会に提案する前の段階で学会連合検討委員会のご意見を伺い、4月5日の運営委員会と4月6日の評議員会で今後の進め方を議論して頂きました。いずれも、来年以降も引き続いて合同大会を開催するようにと積極的に支持されました。会員の皆様のご協力をお願い致します。

ところでこの8月には金沢で国際地球物理金沢会議が開かれます。木村会員ほかの方々のご努力によって順調に準備が進んでいます。9月には箱根で「Magnetospheric substorms」に関する Chapman Conference が開かれます。海

外でも今年はいくつかの国際学会が企画されています。4月には上海で geomagnetism に関するシンポジウム (IAGA)、6月にオランダで COSPAR、8-9月にチェコスロバキアで URSI、同じく8月に米国で SEDIのシンポジウム (IUGG) およびメキシコで EM Induction ワークショップ (IAGA)、10月にはチェコスロバキアでの古地磁気のワークショップ (IAGA) があります。絶えずどこかで国際学会が開かれている時代になりました。

これまでわが国は世界の片隅にあって、学問研究に関する情報はもっぱら一方的に流入するばかりでした。これからは情報がわが国からも東に西に流れ出すよう努力する必要があります。国際地球物理金沢会議や箱根の Chapman Conference はこの意味でも大いに意義があると思われます。さらに国際学会と銘打たないでもこの春のような合同大会が成長して海外の注目を引くようになれば海外からの参加者も増えて、学問研究に関する世界の情報の流れの一環をわが国も担うことができるようになるのではないのでしょうか。こんごの発展を期待します。

III 田中館賞審査報告

第123号 湯元 清文

論文名「地上多点観測によるグローバルモード U L F 波動の研究」

オーロラ嵐に伴って発生する Pi2 地磁気脈動 (周期40-150秒) ならびに昼側磁気圏で連続的に現れる Pc3 型脈動 (周期10-45秒) の観測・研究の歴史は長く、これらの発生および伝播機構については、これまでさまざまな理論モデルが提唱されてきた。しかしながら、それらの波動がグローバルな発生特性をもっているために、その詳細な全貌を解明されるにはいたらなかった。湯元会員は国内外での U L F 波動の観測を通して、Pi2 型脈動や Pc3 型脈動の発生および伝播のグローバルな特性を明らかにしたものである。

湯元会員は U L F 波動測定のためリングコア型センサーを用いた高感度のフラックスゲイト磁力計を自ら開発し、「日豪磁気共役点観測に基づく低緯度磁気圏プラズマ波動の研究」などの海外学術調査によって海外の数多くの点で観測を実施した。これらのデータと、地心距離 4-9 RE の夜側磁気赤道付近を飛翔する AMPTE/CCE 衛星で観測された磁場変化との比較を行い、Pi2 型波動の発生源は極域電離層でなく磁気圏尾部にあり、圧縮性 MHD 波動が磁力線を横切って低緯度まで伝播しているものであることを実証した。通常 Pi2 は夜側で顕著であり、昼側でその存在を確認することは困難であった。これは昼側では Pc3 型波動の活動が活発であり、その変動に隠されるためである。湯元会員は、昼側と夜側の観測所のデータにたいして、新しい CANC (Correlated data adaptive noise cancelling) 法を適用して Pi2 型波動の波形や位相関係を詳しく調べた結果、夜側でみられる Pi2 の95%以上に対応して昼側でも Pi2 型

波動の存在すること、昼側 Pi2 は地心方向には定在的では同位相であるが経度方向には数秒の位相差をもつ伝播性のキャビティモードであること、などを明らかにした。これは Pi2 型波動がキャビティ振動に関連したグローバルな磁力線振動であることを示すものである。これらのことから、湯元会員は Pi2 型脈動の発生伝播機構として、磁気圏尾部で発生した擾乱が一部は磁力線に沿ってアルフェーンモードとして高緯度電離層に伝わり夜側の高緯度 Pi2 型脈動を引き起こすこと、一部は磁気圏尾部から磁力線を横切って磁気音波モードとして低緯度プラズマ圏に達しキャビティ共振を励起して低緯度 Pi2 型脈動を起していることを明らかにした。

そのほか、湯元会員は Pc3 型脈動についても地上のデータと人工衛星データとを比較することにより、その伝播特性を明らかにしている。

以上の通り湯元会員の研究はこの分野の研究の発展に寄与するところが大きい、として評議員会では十分田中館賞に値すると判断した。

IV 運営委員会報告

*庶務報告

前回総会以後、第156回及び第157回運営委員会がそれぞれ、1990年1月26日、4月5日に開催された。第87回大会(1990年春合同学会)の準備としては総会の式次第を決定し、総会議長を丸橋運営委員とした。平成元年度決算案、及び平成2年度予算案の審議を行った。平成元年度決算では約70万円程度の黒字となり、次期繰越金に組み入れた。平成2年度予算に関しては、本年度学術会議及び本学会役員選挙があるので、通信費、印刷費の予算に関してこれを考慮した。平成2年度には早い機会に名簿を作成することとし、この予算を計上した。また、以前に総会で決定したように、平成2年度賛助会費のうち100万円を金沢国際会議の分担金として支出することとした。JGG出版に関する経費の補助分として総計75万円をテラ学術出版に支払うこととした。

次回の大会(第89回、1990年秋)は1990年1月19日(月)~21日(水)の期間、大宮ソニックシティビル市民会館で行うこととした。次次回(第90回、1991年春)に関しては本学会としては今回と同様に地球惑星科学関連学会の合同大会を開きたいということで地震学会と共同で他学会に提案している。今大会の様子を見てから決定するという学会もあり、まだ確定していないが、今回の総会では会場が東京近辺であることを決定し、この間の事情を会長から説明することとした。合同大会の会場としては現時点では共立女子大学(高尾)が候補に上がっている。次次次回(第91回、1991年秋)については9月末から10月始めの時期に沖縄で開催することを総会で提案することとした。総会で決定すれば現在までの準備

状況(航空運賃割引、会場等)を大塩会員から説明してもらおう。金沢国際会議の準備状況について木蔵委員から報告があり、またJGGの出版経費の学会費からの分担についての議論をおこなった。これらについては別項参照。学会基金は現在賛助会費を毎年繰り入れているが、平成2年度には一千万円程度となる。この基金の性格や考え方、有意義な使い方について議論を行った。若手の研究者のための国際交流事業、新しい学会賞の設立等の案が出されている。

*JGG報告

1. 出版状況について

JGG特集号は4月に"Akebono(EXOS-D) Satellite"、6月に"Field Modeling"が出版の予定である。その後、IAGAの特集号として、"Electrodynamics of the Polar Cusp"、"Physics for Formation of Acceleration Regions of Auroral Particles"、"Seventh Quadrennial Symposium on Solar-Terrestrial Physics"、"Core-Mantle Interactions"、"Paleo-intensities: Techniques, Results and Reliability"の出版が企画されている。

このように特集号は盛りだくさんの出版が予定されているのに対し、一般投稿論文については最近また投稿数が減少している。学会会員の研究活動が十分反映されているとは言えず、会員の各位の積極的な論文投稿を切望するものである。

2. JGG論奨励賞候補論文審査について。

JGG編集委員会では今年度のJGG論文奨励賞の候補論文の審査を開始した。

3. JGG出版財政について。

JGGの出版財政の構造的な赤字体制下で、出版ページ数の増加に伴う出版経費の大幅な上昇が深刻な問題になりつつある。この体制を改善することが緊急の課題である。

*WPGM 開催へ向けての準備状況

合同学会の期間中にWPGMのOC(Organizing Committee)、PC(Program Committee)、LOC(Local Organizing Committee)合同会議が開かれ、財政計画、プログラム編成等が検討された。収入面では、登録料の他、地元の石川県や金沢市からの援助、万博協会からの援助、学会協力金などを合わせて約2,400万円の収入が期待でき、支出予定の2,300万円をまかなうことができそうである。この支出予定のうちには、海外からの参加者のための旅費補助用とし300万円確保されている。PCではできればさらに100万円ほど、旅費援助にまわしてほしいと要望している。

うれしいニュースとしては、AGU側もUSAの学生に対する旅費援助を画策しており、すでにNASAから約3万ドルの援助を受けることになったもようである。AGUはNSFにも申請を出しており、見通しは明るいという。そこで、300万円の旅費補助は、アジアからの参加者を主として対象にすることになろう。プログラム委員長を中心にPCで近々具体的選考にはいる予定である。

PCの最大の関心事であるアブストラクトの提出状であるが、出足が鈍く、関係者は非常に心配していた。しかし、2月14日の締切を過ぎてもAGUがアブストラクトを受け付けたためその後順調に増え、3月25日現在総数878でありその内訳は下表の通りである。

	アブストラクト数			
	分野	国内	国外	計
AGUからの最近の連絡によると、総数はすでに900を越え、1000に迫る勢いである。PCではAGUのPC委員と連絡を取りつつ具体的プログラム編成作業を行っている。この作業終了後、暫定案をAGU側で作成し、5月中旬にAGU側PC委員長Chris Harrison氏が来日し、最終プログラムを編成する予定である。	U	3	7	10
	AS	29	13	42
	G	33	14	47
	GP	25	21	46
	H	45	41	86
	O	28	24	52
	P	14	5	19
	S	98	28	126
	SPR	146	76	222
	T	44	15	59
	VGP	134	35	169
	合計	599	279	878

* 新入会員

1989年11月以降運営委員会で承認した新入会員は次の35名の方々である。

(正会員)

小泉 尚 嗣	京都大学防災研究所附属鳥取微小地震観所
藤岡 換太郎	東京大学海洋研究所
三浦 保 範	山口大学理学部地球物理学科
宗像 一 起	信州大学理学部物理学教室
安谷 佳 浩	信州大学教養部物理学教室
中村 直 文	同和工栄(株)資源本部物理探査部
花土 弘	郵政省通信総合研究所庶務宇宙センター
飯島 雅 英	東北大学大学院地球物理学教室
(学生会員)	
鳥越 紀 子	東京大学大学院地球物理学教室
清水 久 芳	北海道大学大学院地球物理学教室
石井 守	京都大学大学院地球物理学教室
梅木 秀 雄	京都大学大学院地球物理学教室
藤本 正 樹	宇宙科学研究所(東大大学院)
小林 香	東北大学大学院地球物理学教室
渡邊 智 彦	東北大学大学院地球物理学教室
百瀬 洋	京都大学大学院地球物理学教室
平原 聖 文	宇宙科学研究所(京大大学院)
岡田 雅 樹	京都大学大学院電子工学
村山 泰 啓	京都大学大学院超高層電波研究センター
武内 仁	東北大学大学院地球物理学教室
松岡 均	東北大学大学院地球物理学教室
小塚 幸 央	東北大学大学院地球物理学教室
加藤 浩 文	東北大学大学院地球物理学教室
田中 勳	東北大学大学院地球物理学教室

天野 武 彦	東北大学大学院地球物理学教室
田中 亜 樹	東北大学大学院地球物理学教室
片瀬 拓 弥	東北大学大学院地球物理学教室
菊地 雅 行	東北大学大学院地球物理学教室
古川 欣 司	東北大学大学院地球物理学教室
長妻 努	東北大学大学院超高層物理研究施設
季 充 秀	京都大学大学院地球物理学教室
味喜 大 介	京都大学大学院地球物理学教室
(海外会員)	

J. Watermann SRI International, CA, USA

G. G. Bowman Dept. of Phys., Univ. of Queensland, Australia.

F. T. Berkey Center for Atmos. and Space Sci., Utah State Univ., USA

新たに賛助会員となって頂くことになりました機関は、クローバーテック株式会社 (1口)

学会会員数(1989年5月現在)

正会員	学生会員	名誉会員	賛助会員	外国会員
524	99	6	20(35口)	53

V 次期・次々・次々々期学会総会ならびに講演会開催地・次期(1990年秋)：第88回総会ならびに講演会

東京大学理学部地球物理学教室のお世話で11月19日(月)～21日の3日大宮ソニックシティビル市民ホール会議室で開催する。

・次々々期(1991年春、首都圏)は今春に引続き第二回地球物理関連合同学会として候補地(共立女子大学、高尾)を検討中である。

・次々々々期(1991年秋)開催地(秋)は琉球大学のお世話により沖縄で開催されることになった。時期は10月中旬頃(水、木、金曜日)。

VI 田中館賞推薦について

第124号会報でお知らせいたしましたが、田中館賞の選考方法が変わりました。「田中館賞受賞者は当分の間4件以内とし、秋に選考を終えて字年度の春の総会で受賞を行う。推薦されて選考の結果採択されなかった論文(候補者)については字年度に限りその後の業績により改めて新規の推薦を受けることが出来るものとする。」

既にお知らせ致しました通り、今年度の同賞の推薦のメ切は5月19日です。候補者を推薦なさる場合には、推薦状、業績(論文)リストと別刷り、略歴書、各11部を期日までに学会会長宛にお送りください。

JGGはわれわれの学会員の研究活動を世に問う場であり、学会の存在理由の重要な一部と考えます。既に繰り返して来たことですが、JGGが国際誌としての地位を次第に固めつつある現在、その基盤の確立にもう一步の努力が要請されています。編集委員会としても、印刷の時間をできるだけ短くして論文発表の速さを編集方針の基礎において今後のJGGの発展を考えています。残念ながら、現在、まだ、JGGの基盤は強固とは云えません。投稿論文数が必ずしも充分でない上に、投稿には大きな揺らぎがあります。出版の基盤は、安定した、多数の論文の投稿の上に成り立つことは言うまでもないところですし、安定した投稿に基づく安定した出版が評価を高め、それがまた、いっそう安定した投稿の基礎になると言うフィードバックの作用があります。会員の皆様方の一層のご投稿をお願い申し上げます。

昨年から始まったJGG論文奨励賞については、今年もすでに推薦を頂いて、現在審査にとりかかっています。論文奨励賞の選考方針は、すでに申し上げましたように、手際よくまとまったものより、むしろ、若さや大胆さ、発想の面白さなどを重視するものです。若い研究者の生きのいい論文を歓迎します。

投稿から出版までの時間を短縮することを考慮して、編集委員会では、投稿をフロッピーで受け付けるシステムを考慮中です。例えばテフなど、限られたフォーマットになるとは思いますが、近い中にこれが実現できますよう、出版社にも検討を始めてもらっています。ただ、全ての投稿者にフロッピーでの投稿を義務づける訳にはいきませんので、当分は従来の組版とフロッピーの2本建てにならざるを得ないでしょう。従って、ここで期待される効果は、主として、フロッピー投稿の論文が速く印刷にまわると云うことと考えられます。

国際誌としての基盤の確立についてのもう一つの問題は、予算に関することです。これは本来学会の問題で、編集委員会のタッチすべきことではないかも知れませんが、すでにさまざま議論されたように、会員の増加、及び発行ページ数の増大に伴って赤字が増えると言う構造は、まさに構造問題以外の何物でもありません。われわれの学会のように小さな規模では、学会の経常経費が大きな部分を占めているので、会員の負担がある程度かさむのはやむを得ない面があるように思います。JGGのみならず、学会の運営の健全化と云う面でもぜひご配慮をお願いしたいものです。学会は無駄であるから解散してAGUに合流すればよい、と言うのであれば話は全く別です。JGGはわれわれの学会活動の存在理由にかかわる本質的な部分であることを充分にお考え下さるようお願いいたします。

地球磁気学の発展に大きく貢献している名高い教科書 GEOMAGNETISM (by S. Chapman and J. Bartels; 2 vols., Oxford University Press (Clarendon), 1940) が出版されてからちょうど半世紀になる。この書には当時隆盛の機運ののっていた地球電磁気学に関する最新の知識のみならず、歴史的重要な文献も網羅されている。従って現在でも、研究課題の歴史的背景を調べる必要が生じた時にはこの書が大いに役立つ。

しかし完璧に近いこの好著(以下GM本と略記)にも所々ミス(誤植も含む)はある[力武常次著:地球電磁気学(岩波書店)p.62脚注参照;また本学会会報第126号にも誤植例があげられている]。

GM本の巻末文献には、世界各国で刊行されていた専門研究報告誌・観測所報告・Expedition報告書などを列挙した上、個別文献ではそれらの報告誌以外の出版物に掲載された論文も多く収録されている。地磁気 S_q 変化については、故長谷川万吉教授を主著者として1936-1938年にかけて帝国学士院記事に連載された8偏の論文内容が図面入りでGM本文中でも紹介されている。島山久尚博士が地磁気湾型変化を扱った論文(1938)が発表された時には、既にGM本は校正段階にあり、本文に入れることはできなかったが、文献として特に内容解説つきで収録している。

GM本における文献収録の努力は敬服に値する。本学会設立に尽力された永田武、前田憲一、加藤愛雄各先生方の論文も引用されているが、残念ながら寺田虎彦の地磁気脈動に関する大作(1917年、東京帝国大学理科大学紀要に掲載)は収録されていない。またGM本発刊当時は地球磁場の逆転事実を未だ万人が認めるに至っていないので、松山基範論文(1929年帝国学士院記事)が引用されていないことは致し方ないことであろう。

BirkelandのNorwegian Aurora Polaris Expedition報告書(1908, 1913)の中で述べられている重要な研究成果についてGM本は4図面を含む約10頁の紙面を割いて紹介している。当時S. Chapmanを総師として磁気嵐の平均特性をまず究明すべきだと主張していた学派に押されてBirkelandのPolar elementary stormの概念は殆ど無視されかかっていた時期であったにも拘らず、Birkelandの業績がGM本の中で詳しく取り上げられていたからこそ、polar elementary stormの概念がsubstormとよばれて復活するに至ったといえよう。ところでGM本出版以前に、Vestine and Chapman(1938)論文でBirkeland電流系(field-aligned currents + horizontal auroral-zone current)は磁気嵐電流系としては失格であると断定されている(実はその議論は著者達の独断敵ミスに基いていることが最近判明した)。しかしGM本にBirkeland電流系に対する排斥を述べている箇所が見当たらないことはまことに興味深い。おそらくChapman, Bartels両大家が適当に妥協した結果そのようになったのであろう。

IX 平成元年度決算・平成2年度予算書

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成元年度決算書

(平成元年4月1日～平成2年3月31日)

収入の部				
科目	元年度予算額	決算	差異	備考
会費	6,238,800	6,095,196	143,609	
正会員	3,990,000	3,891,000	99,000	
学生会員	304,000	340,000	-36,000	
海外会員	244,800	164,196	80,604	
賛助会員	1,700,000	1,700,000	0	
出版助成金	12,629,000	6,120,000	6,509,000	
手帳集	1,200,000	1,451,700	-251,700	
大会	600,000	682,627	-82,627	
利子収入	160,000	188,992	-28,992	
雑収入	3,000	35,060	-32,060	
小計	20,830,800	14,573,575	6,257,225	
前期繰越金	911,479	911,479		
合計	21,742,279	15,485,054		
支出の部				
科目	元年度予算額	決算額	差異	
管理費	2,730,000	2,696,596	33,404	
委託費	2,200,000	2,198,190	1,810	
通信料	100,000	278,369	-28,369	
印刷費	50,000	37,077	62,923	
旅費	100,000	3,610	46,390	
雑費	30,000	170,540	-70,540	
事業費	16,389,000	8,810	21,190	
会誌	13,219,000	9,438,454	6,950,546	
分相金	700,000	6,778,750	6,440,250	
送金	170,000	567,794	132,206	
印刷費	200,000	127,771	42,229	
発送費	950,000	125,812	74,188	
印刷費	1,000,000	849,752	100,268	
その他	100,000	988,595	11,405	
広報活動費	50,000	0	100,000	
名簿作成費	0	0	50,000	
基金	1,700,000	1,700,000	0	
準備金	100,000	0	100,000	
小計	20,919,000	13,835,050	7,083,950	
次期繰越金	823,279	1,650,004		
合計	21,742,279	15,485,054		

地球電磁気・地球惑星圏学会 平成2年度予算書

(平成2年4月1日～平成3年3月31日)

収入の部				
科目	2年度予算額	元年度予算額	決算額	備考
会費	6,235,000	6,238,800	6,095,196	
正会員	3,944,000	3,990,000	3,891,000	519×8,000×.95
学生会員	351,000	304,000	340,000	74×5,000×.95
海外会員	240,000	244,800	164,196	50×8,000×.60
賛助会員	1,700,000	1,700,000	1,700,000	34×50,000
出版助成金	13,488,000	12,629,000	6,120,000	
手帳集	1,400,000	1,200,000	1,451,700	
大会	650,000	600,000	682,627	
利子収入	200,000	160,000	188,992	
雑収入	20,000	3,000	35,060	
小計	21,993,000	20,830,800	14,573,575	
前期繰越金	1,650,004	671,191	911,479	
合計	23,643,004	16,840,691	15,485,054	
支出の部				
科目	2年度予算額	元年度予算額	決算額	
管理費	2,980,000	2,730,000	2,696,596	
委託費	2,200,000	2,200,000	2,198,190	
通信料	300,000	250,000	278,369	
印刷費	50,000	100,000	37,077	
旅費	100,000	50,000	3,610	
雑費	30,000	30,000	170,540	
事業費	18,208,000	16,389,000	8,810	
会誌	14,238,000	13,219,000	9,438,454	
分相金	700,000	700,000	6,778,750	
送金	170,000	700,000	567,794	
印刷費	300,000	200,000	127,771	
発送費	950,000	200,000	125,812	
印刷費	1,000,000	950,000	849,752	
その他	50,000	1,000,000	988,595	
広報活動費	50,000	50,000	0	
名簿作成費	850,000	0	0	
基金	1,000,000	1,700,000	1,700,000	
準備金	100,000	100,000	0	国際地球物理金沢会議
小計	22,988,000	20,919,000	13,835,050	
次期繰越金	655,004	823,279	1,650,004	
合計	23,643,004	21,742,279	15,485,054	

学会基金(平成元年度)

科目	決算額
当期繰入金	1,700,000
前期繰越金	7,600,000
合計	9,300,000

(注) 利子は一般会計へ繰入

<特別会計>

田中館賞(平成元年度)

収入の部			支出の部		
科目	決算額	備考	科目	決算額	備考
利子収入	14,818		賞杯代	12,261	
その他	0		次期繰越金	901,061	
前期繰越金	899,243				
合計	914,061		合計	914,061	

長谷川基金(平成元年度)

収入の部			支出の部		
科目	決算額	備考	科目	決算額	備考
利子収入	29,097		賞杯代	53,652	
その他	391,805		次期繰越金	901,061	
合計	420,902		合計	420,902	

X 研究助成金案内

応募既定・応募用紙は庶務が保管しています。

下記の研究費助成案内が来ています。 推薦を必要とする場合は会長までご連絡ください。

援助名	募集開始	申込期限
山田財団 短期間来日 (1991年4月-1992年3月分)	1990年4月1日	1990年11月30日
山田財団 長期間派遣 (1991年4月-1992年3月分)	1990年4月1日	1990年11月30日
山田財団 短期間派遣	出発月の4カ月前の15日が申込期限 (例:1990年10月出発の場合1989年6月15日が申込期限)	
山田財団 研究助成候補推薦 (1991年4月-1993年3月分)	1990年4月1日	1991年3月31日
トヨタ財団 研究助成 (平成2年度分)	テーマ:1 高度技術社会への対応 2 多文化社会への対応	1990年5月31日
応募先:左記 申請用紙申込:下記送料を添えること 250円(1部)、360円(2~3部)		
〒163 東京都新宿区西新宿2丁目1-1 新宿三井ビル37階 私書箱236号 (財)トヨタ財団 研究助成係 TEL(03)344-1701		

Ⅺ 名簿作成について

地球電磁気・地球惑星圏学会の名簿は1987年9月の発行以来すでに2年半経過しています。この間、新会員の登録、住所変更が多数発生し、改訂版作成が懸案となっていました。先日の総会でもお知らせ致しましたように、下記の要領で新しい名簿を作ることとなりました。会員各位におかれましては正確な最新情報を盛り込むことができますようご協力をお願い致します。

・名簿用原稿(次頁)に記入の上、5月末(厳守)までに学会事務センター宛に送付してください。

・内線電話番号、FAX番号も掲載する予定です。忘れずに記入してください。・1987年9月発行の名簿から住所などが変更になっ

ている場合、赤線を引くなど目立つようにしてください。

・名簿原稿の送付がない場合には1987年9月の名簿と同じ内容が掲載されます。

・9月中に完成して発送する予定です。

名簿用原稿送付先

〒113
東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル内
地球電磁気・地球惑星圏学会
名簿係

<<会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿、お待しています。>>
会長、総務、庶務までご連絡下さい。

会長 行武 毅 東京都文京区弥生1-1-2 東京大学地震研究所
電話 03-816-3795 FAX 816-1159

総務 浜野洋三 東京都文京区弥生2-11-16 東京大学理学部地球物理教室
電話 03-812-2111(内)4293 FAX 818-3247

庶務 林 幹治 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部地球物理研施設
電話 03-815-8020 Fax 818-0745
電子メール d32758@tansei.cc.u-tokyo.ac.jp
d32758@TOKYO

地球電磁気・地球惑星圏学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル
(財)日本学会事務センター内
電話 (03)817-5801
FAX (03)817-5800

地球電磁気・地球惑星圏学会名簿作成用原稿

会員番号 _____ (正、学生) 会員

漢字氏名 _____

ローマ字氏名 _____
(名字, 名前の順)

所属機関名称 _____

所属機関住所 〒 _____

電話番号 _____ (代, 直通) 内線 _____

FAX番号 _____

自宅住所 〒 _____

自宅電話番号 _____

最終学歴 _____ 大学 _____ 学部 _____ 学 19 _____ 年 卒業

_____ 大学大学院 _____ 研究科 (修、博士) 課程

_____ 専攻 19 _____ 年 修了

専門 (次の中から一つ選択)

宇宙線物理	岩石磁気・古地磁気	電波工学	電波・赤外天文
地球・惑星内部	環境科学	惑星間空間	地球内部電磁気学
生物科学	太陽物理	年代学	宇宙工学
地球・惑星磁気圏	火山学	宇宙プラズマ	地球・惑星電離圏
地震学	地球・惑星探査	地球・惑星大気	海洋学
測地学	太陽系・惑星起源論	物理探査	地球・惑星地質学
地球・惑星磁場生成論	磁気探査・磁気異常		地球・惑星開発工学
その他 ()			

備考 (特に注意する点、学会事務センターへの希望など)